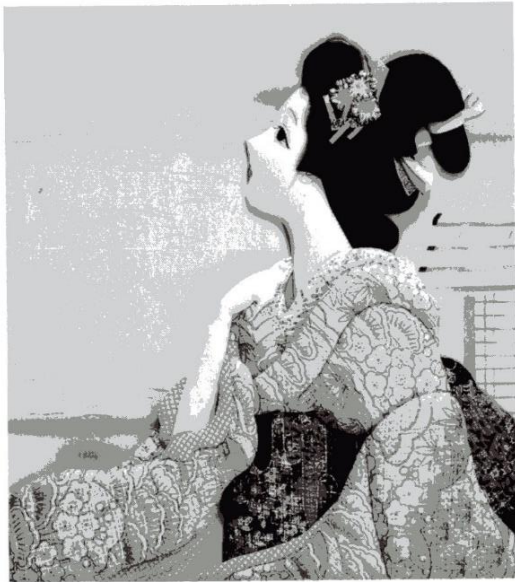


# 佐東の文化

No.35



押絵 井口 きよ子

平成21年10月15日

# 佐東の文化

No.  
35



# 佐東文化協会

目次

巻頭言

記憶と記録……………谷口重人……………1

特別寄稿

影山界限……………岡田千茶……………2

一以貫之の心……………阿部雲魚……………4

所感寸言

思い出あれこれ……………江見英雄……………7

老いのたわ言……………吉政実夫……………8

母の死……………井口祥子……………9

「古い」を思う……………松井洋子……………10

随筆随想

米寿を迎え……………加藤美雪……………13

受難の時代……………長瀬加代子……………14

牛……………衣笠隼巳……………15

介護予防のストレッチ体操と私……………加藤幸子……………16

科学の力……………井上健一……………17

よろこび、そして……………岩本全子……………18

引揚船「長運丸」に乗って……………黒石貞子……………20

流転の細い道……………岡出海……………21

歴史紀行

古代美作「勝田・英田郡」の素描……………加藤芳英……………23

発想の転換……………井上健一……………24

出雲往来と江見の橋……………安東靖雄……………25

壇ノ浦の戦いで、海に沈んだ安徳天皇は替え玉だった……………宿野喜一……………26

短文芸

俳句

アカシヤの花……………江見英雄……………29

初詣……………春名静山……………29

葱……………春名波留夫……………30

巢立ち……………山下照夫……………30

選挙戦……………加藤美雪……………30

春の川……………青山元江……………30

紫陽花……………樽井悦子……………31

茄子……………樽井清江……………31

物忘れ……………杉本幸子……………31

梅雨……………坂井はつ子……………31

母子……………山本靖子……………32

あさなぎの……………沖田はるみ……………32

鈴虫の夜明……………森本久子……………32

道……………真野雅子……………32

題字

山本章

夏	旅仕度	吾が古いの生きざま	儂きは	花	茶のかをり	初蛩	里山	吾が身のまはり	わが村	感謝	白鷺	残り香	をさな子	性をまま	笑顔信じて	一年生	夫よ	雨の美と空の雲	友と睦みて	折りふし思ふ	シーソーゲーム	大山
福島	船曳	新免	黒石	黒石	北村	森本	加藤	末宗	長澤	新免	江見	小林	加百	横山	横山	新田	原田	梅本	有元	宿野	小林	名部
美智子	文子	初子	貞子	登代	和子	かよ子	保子	ちとせ	和枝	三代	眞智子	洋子	由起子	昌子	美恵子	千晶	順子	信恵	理嘉子	和穂	増代	みどり
51	51	51	50	50	50	50	49	49	49	48	48	48	48	47	47	47	47	46	46	46	46	45

同窓会	たおやめの空の旅	世の移り	わが故郷は	母	ホテルのスリッパ	ふる里	後期高齢者	母の顔	明日も晴	手紙	鉄扉の中	月日重ねて	飾る	外国頼み	独り居	向日葵	川柳	労りつつ	新緑	四季折々	若葉
坂井	江見	春名	釜田	原部	名部	遠藤	名部	新免	原幸	山本	山本	坂井	山本	山下	江見	春名	山本	山本	坂部	青山	井口
はつ子	英雄	静山	玉枝	洋一	みどり	榮	和子	三代	幸子	昌子	登山	はつ子	千恵	照夫	英雄	静山	登山	登山	金治	美和子	祥子
39	39	38	38	37	37	37	36	36	36	36	35	35	35	35	34	34	33	33	33	33	33

たのしみ介護車	イミテーション	初燕	能登香	洗ひてくれぬ	同窓会	折にふれ	春暖	棚田にて	老	燕	里山	母の日に	折折に	せせらぎ	梅雨	鴉	生きる	八十八夜	日食	大人のぬり絵	発見し発心せよ	すもも
森本	藤本	原幸	横林	清田	池田	鳥形	内藤	大内	光井	藤川	安西	野沢	名部	井上	松本	坂部	井口	山下	山照	杉本	加藤	加藤
久子	伸子	幸子	富砂子	三智子	保子	節子	慶子	佐智	房子	亜也	苑	老梅	和子	智	哲夫	金治	秀子	三代子	照夫	幸子	芳英	幸子
45	45	45	44	44	44	43	43	43	43	42	42	42	42	41	41	41	40	40	40	40	39	39

夏椿	秋の光	思ひ出	子	言葉	春が来る	二人の気まま展	未来を想ふ	曾孫	渚の院	また闇を呼ぶ	作東文化協会グループ紹介	作東文化協会会則	平成20年度 作東文化協会事業報告	平成20年度 作東文化協会決算報告	平成21年度 作東文化協会会員・役員名簿	編集後記
中川	阿部	角南	角利	入矢	日下	浜田	徳野	川崎	三浦	関内	関内	関内	関内	関内	関内	関内
富美枝	すみゑ	三津ゑ	利津	敏江	智加枝	くに子	富美子	晃	智江子	惇	惇	惇	惇	惇	惇	惇
51	52	52	52	52	53	53	53	53	54	54	55	59	61	62	63	74

表紙説明  
 刻字  
 寿(壽)  
 北村親嗣(石舟)

## 〔巻頭言〕 記憶と記録

会長 谷口 重人

本誌「作東の文化」の創刊号から七号にかけて短文芸俳句の欄に、谷口楳軒の俳句が掲載されています。楳軒は亡父章雄の俳号です。

読み進むと当時の父の心境や生活の一部を垣間見ることが出来ます。わずか十七文字に凝縮された一句一句に、短いがゆえに込められた思いが想像をかきたててくれます。

記憶は年月を経て薄れ、やがて消失される定めにあります。しかし、記録はそれを読み返されることによって記憶を蘇らせ、さらに想像をも加えて美化されていくものだと思います。

本誌は決して立派とばかりは言えない小冊子にすぎない文化誌ですが、作東地域の文化と生活を後世に伝える貴重な資料と言えるのではないのでしょうか。本号で三十五号、三十五年間創り続けられた事実は何物にも代えがたい歴史と言えます。

願わくは多くの会員諸氏によって、次の世代に贈るメッセージの場として本誌を活用され、さらに歴史が積み重ねられていくことを望みたいと思います。

## 特別寄稿

### 影山 界限

岡田 千茶  
(朝日新聞岡山柳壇選者)

朝日新聞に毎週〇〇かいわいという記事が載る。これに習い、私の子供の頃の集落を復活させてみる。

江見の町から東へ伸びる県道は、やがて四キロぐらいで兵庫県に入る。その手前、江見から一キロぐらい東へ行つた処に、県道を挟んで商家ばかり八軒の家が並んでいた。南に山を背負っていたから、ほとんどの家は日当たりが悪く、誰言うともなく此処のことを影山と呼んでいた。

どの家も近隣から移り住んでいたもので、出所の地名を付けた屋号で呼ばれている家が多かった。一番西の江見からとりつきの下駄屋は、福山村万善の出だから「万善屋」だった。店と県道を挟んだ向かい側の仕事場では、小父さんが浄瑠璃を口ずさみながら桐下駄を拵えていた。

店では商家の女将さんらしい小奇麗な小母さんが、たばこを売りながら何時見ても下駄の鼻緒をすげていた。

私は仕事場のまん前に座って、小父さんの手元を黙って見ているか、店先に置いてある一畳台に寝転んで、養子のミーちゃん(子供でも自然にそれを知っていた)が買ってもらっていた「潭海」という雑誌を読んでいた。

下駄屋の次は畳屋で、六畳ぐらいの土間に台を据えて、私の父と鳥取の歩兵連隊で同年兵だった小父さんが肘を突いて畳に縁取りを縫じ付けていたりしていた。この小父さんは子供が嫌いで何時も白目で睨みつけるから恐ろしかった。反対に小母さんは優しく、縁先にしつらえた薦の織り機に向かい、藁を噛ませて薦を織っていた。小父さんは大阪などに出稼ぎに行き、留守が多かったので、娘のミヨちゃん、下駄屋の娘やエちゃんらと、此処の家を遊び場にしてよく遊んだ。私とミヨちゃんは同年生まれなので、小学校へあがったら並んで座ればいいと、小母さんが



たびたび言っていたから、私はそうするものと思っていたが、現実はそのものではなかった。

畳屋の東は提灯屋で、年寄り夫婦と孫のマーちゃんが暮らしていた。お爺さんは仕事場に座って、番傘を貼ったり、提灯を拵えていた。マーちゃんが居たからよく遊びに行つて傘に字を入れる仕事など見ていた。お婆さんは奇麗好きというか潔癖で厳格で、草履など脱いでそのまま座敷に上がるものなら、「雑巾で足を拭いてあがりんさい」と、白目を三角にして叱られた。この一家が何時何処から来たか知らないが、日頃のあしらいからして、マーちゃんは訳ありの孫だったに違いない。

畳屋の向かいには自転車で、土居村からの移住。元々大工さんだった小父さんは気さくな人で、器用に自転車の修理などしていた。小母さんは産婆さんで、私を取り上げて下さったのはこの方だ。子供は女ばかり三人、皆年上だったから一緒に遊んだことはない。

次は紺屋、仕事場の土間に藍瓶が埋め込まれていて藍染めをしていた。この家も娘二人、年上だから遊んだことはない。ある冬の夜、母屋と道を隔てた仕事場が火事になり全焼した。震えながら見ていた記憶は鮮明だ。

紺屋の東は散髪屋。元人力車の車夫をしていたお爺さ

んと、理髪をしているお婆さんの二人暮らし、私が祖母に抱かれて産毛を剃ってもらいに行き、以来お世話になった。二人に子はなく、足の不自由な貴い子の娘が居て、何処かに奉公に行っているのが、時々顔を見せていた。

集落の一番東にあった私の生まれた家の真向かいには、隣の集落大谷で造り酒屋をしていた（不確かな記憶では銘柄は「杉坂泉」のをやめて、酒の小売りをしていたから酒屋と呼ばれ、酒のほか、塩、醤油その他干物など諸々の雑貨を商っていた。毎晩、大谷に住む小父さんが、一合だけ酒を飲みにやつてきていた。息子さんは津山市に住んでいて、孫達が時々遊びに来ていた。名前を忘れたが同年輩の男の子がいて一緒に遊んだが、何となく都会の子らしい垢ぬけた雰囲気があった。

さて、私の家は大谷の集落の隣、田原から祖母と母がこちらへ越してきて小間物屋を始めた。田原の田と地元上福原の福をとって福田屋という屋号だった。祖父はとうに亡くなっており、隣村粟井生まれで、県北の大原の酒屋か醤油屋で店員をしていた私の父を養子に迎え、私が物心ついた頃は呉服小間物店をやっていた。

父は自転車で林野の町へ仕入れに行き、それを自転車の荷台に積んで近隣の集落を売り歩いていて。小さい店

には、土間を隔てて陳列棚がしつらえられて化粧品瓶などが並べられ、座敷の戸棚は呉服反物を収めてあり、母は店番をしながらミシンを踏んで小物など縫って売っていた。特に記憶に残っているのは、母の考案した幼児用エプロンで、犬の形をしたポケットが斬新で大当たりして

縫うのに追われていた。母は夜になつてもミシンから離れず、私が母にもたれるようにして、勉強のことを尋ねても相手にしてくれなかった。その無理がたたつたのか結核になり、私が九歳の時三十三で亡くなった。

そのことと戦争の影が忍び寄ってきて、商売を止めた。

## 一以貫之の心

## 阿部雲魚

(書家 岡山市)

書が好きで仕方がない程、筆を持って日々を暮らした。一番最初は、大内谷の故里で習字を友人二人で習学していた。

小野鷺堂先生の仮名を多分に入れた流れの鷺堂流だった。これが正しい書の道かと反問しながら日時は過ぎ、一度上阪し、その真偽や学び方を研学した。どうも鷺堂流ではと、大抵の先生は好まれなかった。

そこで、東京に出て比田井天来先生の所の門下にとし料し、上田桑鳩先生をお訪ねしたら、少しずつ本格の書は辻本史邑師のものより法帖主義の比田井門と決定した。

入塾してみると、その精神性に私と合一しない点多くの疑問を生み、早目に退いて師を覚めず、篤信好学の川合信水先生の訓に従うことにしたら、随分異なった書の道であった。

それからは唯一人こつこつと己の道を覚めることにしたら立身出世をしない方途を誰とも競争することもなく、自然法爾の道ではあるが、自由自在の中に道は爾に在りと知り、書道の道の方向を独習に切り替えて有名人にならず、成功の道避けて自由闊達に毎日の行として書の道と歩みを決めて、とうとう生涯の筆の道となった。

茨城県高萩の高橋晴太郎氏の二階を宿泊と定め、主人

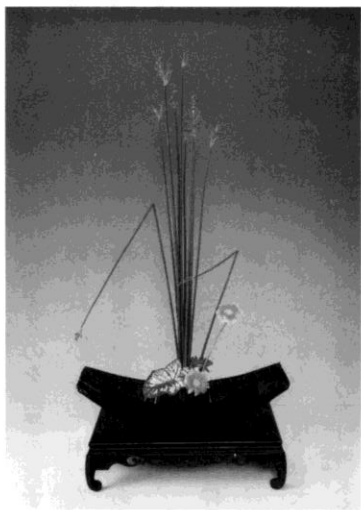
# 肝感寸言

感想や批評を文章で表現する

簡単そうで難しい

しかし文章化されることで

新たな感想や批評が生まれる



生花 池田保子

の魚屋料理の手伝いもした。高橋の主人は頭山満みつる氏の料理番頭と聴き、一驚した。或る時、家猫が魚肉を食べようとした瞬間に包丁を投げ、即座に猫は死した。その愛猫に投げた一包丁の名人として頭山翁は「高橋でかした」と賞讃し、その心根が立派であり、技の名手の一包丁が当たり、猫は瞬時に死した。その心技の妙は誰も知る人ぞ識るのみで私一人の知悉ちしつの一頁であり、おおいなるかな頭山・高橋両氏の心技を知った。

間もなくして高橋邸を退き、近くの志村邸に入った。この家は撞球場ぶつぎゅうじょうの家で、私是一向に気が向かぬので、一度も見たことも、したこともない。私にはそれが私に価値を生むものでなく、見向きもすることなく、その邸を退き、他の家に下宿した。

下宿を変転としてその家の様子を知り、人間生き方を知悉用立にした。人生行路は誠に変化があり、その邸毎に人変わり、多くの教訓を経て、とうとう今の九十有七年も生き、筆の生活八十年を経験して勿体ない人心を日々受けて向後の人生に益していききたいものだ。



写真 井口満春

## 思い出あれこれ

江見英雄

私は大正四年生まれの九十五歳である。老境にはあるが、朝五時過ぎ、新聞の届けらるるのが待ち遠しい。社会の進運に伴い、それにより事件事故も多発しています。また、近来人命が軽くあしらわれているように思われます。一度失ったら再びは得られぬ命だからお互い人間は生命を最大限尊重すべきであることを自覚すべきだと思います。

私の祖父は万延元年、あの風雲急を告げる頃の生まれとしては楽天的だったように思う。一般的教養の他に建築、神学、東洋医学等のことをも心得ていた。田舎だから医者に簡単にはかかれない。そんな時、筋違ぢかぢいや

肩かたこりの人があるとギシンというハリで治していた。建築の頭領もしていたので、方位方向の良し悪しはお手のものだ。村で建前があると父祖二人頼まれ、棟上げ旗を二本貰ってくるともある。夕の祖父の祝詞のりとは子守歌に聞いて寝た。正月の頃は、祖父はお日待の祈禱に次の家から次へと、一ヶ月近くも顔を見せぬこともあった。昔は信仰も大らかだった。

村には日吉大社の分社日吉神社もあり、これの屋根葺替葺きかの遷宮せんぐうには境内の燈火を全部消して行う。

秋には産土神様うぶぢがみのお祭りまつりで若い衆が獅子舞を奉納する。唐子童児からこどうじは男の子二人。やや大きなまりが一人男

だ。私もまり役をつとめたが、頭は丸刈、白粉で化粧して女装してまりを持つて獅子にからみ、舞うのだ。私は女装するのを同級の女子に見られるのがはずかしくて困った。また、村には備前池田候から村にある天台宗及び真言宗の両寺に対し、年二十六石

かの米の交付がある。仲よくうまく頒けよということだが、なかなかうまくは行かぬ。何でも天台の寺は山や田を、真言の寺は檀家だんかを多くとり、経営し易くと考えた。それでも村人は村の寺だから、月の十七日は観音様の夕。二十日は真言のお大師様の縁日として村内全戸から米一合ずつ位集め、当家とうやから少し加えてお供そとぎし、これを押し抜きにして丸い小さなへゲに盛ってお供し、読経後、接待したのである。子供は大人について寺に

上り、大きな建物を遠慮もなくかけずり廻って遊んだものだ。毎夕お宮とお寺には村人各戸交代でお燈明を上げねばならぬ。大正十二年に関東大震災があり、私たちは使用済みの教科書を関東へ送った。

大正十三年には大旱魃で、水の出そうな処は掘りつくした。また、子供は薬缶やま土びんに水を入れ、一株毎に

稲株いねに水をかけて廻る、あとは神頼み。村の青年が藩池田候から貰った鉦鐘樓から鉦をはずし、しばらく池につけ、引揚げ、元に戻し、村中で雨請あまひ大祈禱たいせいはつ清拔するや否や大雷鳴あり。でも此の年、政府の世話でタイ米の白いのを配給した。大抵の人が麦飯を食べるよりよいと言っていた。

## 老いのたわ言

吉政実夫

先日、仏教書を読んでいたら、「見ず知らずの人が何かの縁で結ばれ、この世は、しばし縁で、しばらくの間、夫であり、妻であり、親となり、子供である。」と書かれていた。大宇宙の流れの中では、一瞬一時の出来事で

ある。その一瞬一時の生活を大切に大切に生きており、その幸福な家庭を何の前ぶれもなく訪れる無常の風、この風は如何なる知恵者、如何なる修行をつんだ聖人でも、何とも動かすことはできない。通り魔や交通事

故に、何時まきこまれるかわからない。考えてみると、人間の命が如何に尊いかわかるように感じる。  
永らえて九十二歳、長寿を保つことができたのは、近隣・親戚の人達に守られての日々。(感謝・感謝)  
映画の「おくりびと」ではないが、「おくられびと」にあまり遠くない。近づくお盆の行事も、心を込めて、先祖まつりをせねばならぬと思います。毎度のことながら、とりとめのつかない「たわ言」を並べ、お許しください。



## 母の死

井口祥子

昨年十月七日、私の大好きな母が突然他界してしまいました。享年九十五歳。亡くなる日まで元気だった母、働きづめだった母がどうしてあの世へ行ってしまったんだらう。母はいつも「どうしてこんなに長生きしたんだらう。」と口癖のように言うので、「おばあちゃん、長生きして私達子どもや孫、曾孫の生きるお手本になってちょうだい。」と答えていた私にとって、その死は表わしようのない大きな衝撃でした。

母の愛に育まれ、見守られ、叱られ、励まされた七十年でありました。母からいろいろなことを教えてもらいました。生きざまを身を以って示し

てくれました。

農家に嫁いだ母は、農業技師の父と共に山陽町高月や西大寺に暮らしていました。戦後、祖父の住む角南へ帰り、農業一筋で苦勞の連続であつたと思われまふ。

その頃は、田植えなどの農作業はほとんど手作業でしておりました。子育てにゆっくり時を費やす暇もなく、田植え前の苗取り等は女の仕事で、早朝暗いうちから起きて苗取りをし、みんなが揃う頃には、すぐ田植えができるように準備万端整えていました。戦後の物資の不自由な時も手作りした防空頭巾、手編みのセーター、そして食べる物もさつまいも、

南瓜等をいっぱい作ってくれました。

祖父母が亡くなり、昭和五十三年に父を亡くしてから三十年間、勤めをしていた私達夫婦を支え、三人の孫の面倒を見ながら田畑を守ってき

てくれました。春の茶摘みに始まって梅漬け、みそ作り等々毎年やり続けた母は大きな病気もせず、「下痢をしたら何も食べずにおればなおる。」とか、「風邪を引けば寝ておればいい。」とか、「カラオケや詩吟で大きな声を張り上げれば元気が出る。」とか、いつも一緒に楽しい日々を過ごすことができました。

子ども二人、孫五人、曾孫十二人に多くの愛をそそぎ、その成長のみを楽しみに生きてきた母に「ありがとう お母さん。」と感謝の言葉を贈り

たい。

## 「古い」を思う

松井洋子



未熟者の私でも、もう還暦を迎える年となりました。以前より目は老眼で眼鏡は手放せなくなり、頭は白髪が増えてきました。また、記憶力も悪くなり、物忘れが多くなりつつあります。身体も硬くなり、動作は緩慢になっていきます。これからの私はどうなるのだろうかと不安に駆られることもあります。身体の衰えを感じるようになって初めて気付かされることもありません。何事も体験してみなければわからないこと、年齢を重ねなくてはわからないことがあるとい

うことです。古いというものに向かい、諦め、焦燥感、不安を感じながらも、老いを肯定し、これからの人生をどう生きて行くか思索しなければならぬ時代には老いての人生は考える必要がなかったかもしれませんが、平均寿命が延びた現在では長いであろう老後を如何に生きていくか(精神面、生活面とも)自ずと思案するようになると思います。若い頃には考えなかつた老いについて、老いに向かいつつある頃に初めて気付かされる

ことです。生物にとって死は避け得ない絶対的なものですから、それに向かつて少しでも良い老後を送れるように老いの入口に立つて考えなくてはと思います。

しかし、いくら自分が古い仕度を整えようとしても予期せぬできごと

に遭遇することも多いでしょう。経済的なこと、健康を損なつた場合、配偶者の死など様々なアクシデントが発生するかも知れません。願わくば健康に呆けないようにと思いますが、未知なる領域は視界不良です。途中で挫折する事態に陥るかも知れませんが、静かに終着駅に辿り着きたいものです。これから老いに向かつてじっくり前進するのみです。

老いを考えるうえで思い出すのは二年前に逝つた実父のことです。片

田舎で農業一筋に生きてきた父ですが、人の役に立つことを好んだようでも様々な役員を務めていました。几帳面で、亡くなるまで家計簿を記帳し、晩年には自分の葬儀の時の役配まで準備していました。また、自分の死後荒れるであろう小さな田畑に植林し、枝打ちしていました。老いた時の心掛けを話しているのを聞いたことがありました。それは、老人は家の中に閉じ込んではいけない、外へ出て人と交わらなければいけないということでした。そういう父でしたから催し物がある時は積極的に参加していました。また自家製のお茶や野山の産物を持参して親戚など訪問していました。

父の真似はできませんが、残りの人生をゆつくり生き抜きたいです。

# 随筆随想

おりにふれて

感じたことや

見聞・体験を

なにくれとなく

書き綴る

思いのままに



日本画 原田 縫子



洋画 原田 照子



## 米寿を迎え

加藤 美雪

リハビリテーションとは、「傷病で身体や精神に後遺症をもつ人に再び社会生活に戻れるように回復訓練を行うこと」と辞書に載っています。

そうならば言うことではないのですが、振り返ってみれば五十歳頃、脛に水が溜り、外科の先生に抜いてもらえば又普通に歩け出している。その内に又水が溜り、繰り返している内に腰も痛くなり、コルセットを専門の方に造って頂きましたが、余り幅が広く、狭いのに替えてリハビリに通っております。

その内血圧も高くなり、内科の先生より薬を呑むよう勧められたので、どうやら上は一五〇程で維持してお

でもリハビリテーションは送迎をして頂くので、これがなければ続かないと思われず。

りますので少しは安心致しております。そうしている内、平成十七年四月に電動車に乗れば少しは楽になると思いましたが、自宅は坂があり、国道が前を通っているのと歩道が狭いのでこれでは乗らない方がよいと思っております。その内、乗ってみればと親戚より頂いたので稽古してみれば、家の回りだけだと思つて乗っております。一寸した思い違いで車と共に倒れてそのまま医院へ行きました。大腿骨が折れていると言われ、すぐ入院して、どうやらシルバーカーで歩けるようになり、続いてリハビリに通っておりますが、杖やシルバーカーなしでは歩けません。

介護士さんの優しさや若さを頂き、週二回二十人の色々な方と出会い、やはりお話ができるのが一番ですね。詩吟、歌謡曲、大きな声でカルタを読んで下さる人、いつも同じことばかり話す人、人それぞれですが、生花や詩吟の先生がこられて指導してくださるのも心が和まれてよいことと思います。時々ボランティアの人が踊りや歌等の上手な人がこられて見せてもらうのも良いレクリエーションと思われず。又送迎の車の内でも美作市は合併して広くなりましたので、ぐるっと景色や道も山の中ほどよくなっておりますので、話を花をさかせて一日が終わりますのもよい

ことと思われず。

早や通所しだしてから四年が過ぎますが、一年、一年、年を重ねますので高血圧には気を付け、できることは自分で少しづつ時間をかけてすぐに人に頼りすぎないように動いたり休

んだりして頑張っております。次の言葉を実行したいと思います。

1. あきらめない
2. 夢を持つこと
3. 年のことは考えないで

私の童話に出てくる鹿のように思えて声をかけそうになった。「おや、鹿さん、今日はどこへいくの」童話の中ではえりちゃんとおぼばの旅行に鹿がついてくる。鹿はしばらく私の顔を見ていたが、さつと林の奥へ走り去った。

そして今年、梅雨の晴れ間の日のこと、裏の畑に出ると、狸がこつちへ向かって歩いてくる。人間には関心がないという風に小走りに私の前を横切り、庭の繁みに消えた。

それから一週間後、今度は前の畑の隅に猿がちよこんと座っているのに出くわした。私を見ても逃げようとしなない。カメラを取りに家に戻り、再び外に出ると猿の姿は見え、畑の中でガサゴソ音がする。猿がどうもろこしを取っていた。「こら」と、声

## 受難の時代

長瀬 加代子

昨年、童話集「ふたご山のおじぞうさん」を自費出版した。この本には十篇の作品を収め、作中に色々な動物が出てくる。その中、「記憶どろぼう」(平成十四年度岡山県文学選奨佳作)には、たぬき、しか、くまが登場する。主人公のえりちゃんと動物たちの交流の場面はほのぼのとして、たぬきやさしかは愛らしい存在である。

こうした場面は作者の想像の世界であって、まさか自宅近くに鹿や狸、猿が現れるなど考えたこともなかった。ところが、童話の世界が現実になった。

昨秋、ウォーキングで近くの農道を歩いている途中、右手の檜林にいる鹿と出会った。可愛らしい大きな目で、じつとこつちを見つめる。一瞬、

をかけると、実一つ残さずに食べたカスを一本投げ捨て、もう一本を口にくわえて、猿は逃げていった。

童話の世界の動物に実際に出会った時、私は懐かしい人に会ったように、人間なら握手したい気持ちになった。しかし、現実はずきずきしい。握手などもつての外、動物たちは農家の敵だったのだ。

童話の世界では、多少のいたずらですんでいるが、今、わが家近くに現

れる鹿や猿は農作物を荒らし、農家の人はその被害に頭を抱えている。一方、近くの田んぼで子鹿が銃で撃たれた。去年の秋のことである。

農道には、鹿の被害対策に防護柵が張りめぐらされ、その柵の中を歩きながら、私は受難の時代だなどつぶやく。

童話の世界のような人と動物の優しい関係に戻るのはもう無理なのだろうか。

## 牛

### 衣笠隼巳

古い話を持ち出してあれこれ言うのもどうかと思ったが、それも一興かと思ひ、書いてみた。今年が丑年であるため、敢て牛の変遷を辿ってみ

ることにしました。

人々の生活の中でベットはベットとして、家畜は家畜として人と係わってきたが、牛だけは特別な運命を

辿ったような気がする。大昔の高貴なお方の車を牽く牛は別として、近代までは家族の一員と同様に扱われていた。特に労力を提供する点では貴重な存在だった。当時の農家は同じ屋根の下で出入口の隣の日当たりの良い場所が牛の部屋に充てられていた。食事にしても家族が食卓につく前に食事（餌）が与えられた。そして現金収入の少ない時代にあつて仔牛を売つての収益は魅力だった。農繁期になると鞍をつけて農作業にかり出され、主人に従順に従い、速度こそ遅いが嫌がりもせず、早朝から夕方まで文句も言わず働いた。いくら疲れていても翌日も、また次の日も一だから大事にするのもうなずける。

全国各地には牛を祀る神社もあり、

大祭には多くの参拝者で賑わったものだ。旧作東町川北では、毎年、牛市

が開かれ、多くの仔牛が取り引きされ、活況を呈していた。まだトラックも少ない時代、江見駅の引込線には牛運搬用の貨車が横付けされ、積まれて行った。一方、農家では久しぶりの大枚が入り、ほくほく顔で家へ帰ったものだ。やがて農家にも耕耘機やトラクターが普及するようになる。と牛の出番も次第に少なくなっていく。そして、あれ程大切にされてきた牛も、その目的すら変わっていった。

今、どこかスーパーへ行っても生産地を標示した牛肉が、ところ狭しと並べられ、品質を競い合っている。そして、人々の牛に対する価値観も変わり、牛とは肉を提供するものと

して定着しているのを見ると隔世の感がする。

平素見かけることもなくなった牛でも、言葉の中や諺には多く残っている。角を磨いて牛が死んだ、牛に引かれて善光寺参り、牛糞にも段々、牛

## 介護予防のストレッチ体操と私

加藤 幸子

仙骨部難治性潰瘍の治療として背部の筋肉移植を受け、全くの寝たきり生活となった。二週間経て「食事時のみ坐位を許す。」と言われた時には、やれやれと思つたが、全く途方に暮れた。自分の力では起き上がる事ができなくなっているのである。ベッドの力を借りるより外はない。ボタンを押して大きな板に押し上げら

れ、久し振りに坐った時には、目も眩む思いであった。今まで寝たきりの時は何もかも親切に世話してきていた看護師も、「加藤さん、これからは何でも自分でして下さい。歩く練習もすっかりして、トイレに一人で行くようにするんですよ。」とベッド上に一人にされた時には、取り付く島もなかった。看護師は起きるに

も寝るにも、手を貸してもくれない。こんなことなら入院の時、看護師は親切で優しいなどと、感想を書くんじゃないかなかった、と思ったものだ。でもそれは間違いだ。私だって義父が脳卒中で倒れ、半身不随のまま十一年近くベッド上で暮らした時、自分で歩こうよ、自分で立とうよ、風呂へ行こうよと励まし続けたが、本人は苦しかったに違いない。父もよく頑張ったのだ。私も頑張らなくては。自分のことだ。自分がやらなくては、誰がやってくれる者がある。私は先ず腕力を付けることに思いついて、ベッドに寝たまま肘の屈伸、手首や肩回し、グーパー、グーパー等できるだけのストレッチを繰り返した。有難いことに筋肉は動かせば動かしただけそれなりの力がついてくれる。

いる物もないと思う。

テレビや電話、冷蔵庫等々と、コンピュータが組み込まれている生活用品を数えればきりが無い。

今から四十年前の七月に、人類が初めて月面を踏んだ。その時の様子は世界中に放映された。当然ながら、発射基地の様子も放映された。大きな部屋の中に、ものすごい数の機械があった。これがコンピュータと言うものかと思っただけである。

発射基地の部屋中にあつた機械を全て取り込み、更に性能をアップし、小さな机の上にも載るパソコンと呼ばれる電子機械が世界中に広がっている。

このパソコンを使えば、世界中の買い物ができたり、調べようとするものがすぐ分かる。更に、視覚障害者

ベッドの柵に掴まって横向きに、スリと起き上がることができた時は嬉しかった。坐れたら足の番だ。週一回で三ヶ月間の教室だったけれど、覚えてはいるだけ、身体の動かせるだけ、順序不同で手肩首足腰とストレッチを毎日繰り返した。やっぱり何とか力が付いている。点滴ポールに掴まってスルスルと廊下を歩けるようになった。自然尿管も外され、身も軽くなり、歩行練習を行った。杖を持つてはいるのに知らぬ間に杖が邪魔に

## 科学の力

井上健一

私が生まれてから既に五十余年の月日が流れた。この五十年で最も発達した機械と言え、コンピュータ

なっているのに気が付いた時には、我ながらびびくりした。杖を使わずにすらすらと歩いたのである。少しの間の介護予防のストレッチ教室がこんな大きく私にプラスになっていたのかと思った。今や市をあげて楽しくあ体操に打ち込み、老若男女楽しく介護予防の体操を続けておられるが、大変結構なことだと思ふ。皆さん、頑張ってください。私も動けるだけ自分で続けて、限りなく動いていたいと思つてはいる。

や聴覚障害者でも一般の人と同じ操作ができるソフトもある。

例えば、全盲の方でも一般の文章が読み書きできるわけである。更に驚いたのは、コンピュータと会話ができるソフトまで既に発売されているのである。全く知らない地域の地図案内や宿泊場所のサポートまでしてくれる。

## よろこび、そして

岩本全子

夕方の五時です。「夕やけこやけ」のメロディが流れてきます。毎日同じ曲ではないけれども、少し自分流に編曲して孫の子守歌にしていた主人、いくら直すように言っても直さなかつた主人、一人っ子の息子に「悠

科学の力と言うものは本当に素晴らしいものだと思う。パソコンを通じて人の和を作り出すことができるからだ。

だが、いかに優れた機械でもそれを使うのは、人間だと言うことを忘れてはならない。コンピュータをうまく利用し、快適な社会を作りたものである。

香、龍人、蒼大、怜実」と四人の孫が元気に育っています。中二、四年、年少、一歳六ヶ月と男二人、女二人の孫に恵まれて、その子守歌も少し上達しているように思います。

入院していた時はいろいろなもの

を製作してベッドの前に飾ってくれました。「おじいちゃん、たいいん、おめでどう」その子も小学一年生の頃。今はもう中学生になっています。いろいろな作品を大切にしまっただけは見えていましたね。ベッドと一緒に寝たり、その「うれしさ、よろこび」を身体いっぱい表現していた主人動物、小鳥に詳しく、テレビを観ながら孫たちに説明していましたね。

四十歳を過ぎてから「糖尿病」と診断され、インシュリン注射をし、適度の運動をし、私は食事をよく研究して作り、まあまあよい状態を維持しているように思っていました。六月七日午後、帰らぬ人となりました。オリンピックの年、昭和三十九年結婚し、四月から大阪での新婚生活が始まりました。私も大阪の幼稚園

に移り、不安と楽しみの日々でした。土居暮らしの私にとってはすべて興味津々、特に京都の春風山、万博、そして生駒から観た大阪の夜景など数えきれない楽しい思い出があります。その中で忘れてはいけない風景、それは、私の勤めていた幼稚園が私立でしたので行事の前には夜遅く帰っていました。そんな時はいつも料理を作って二人で楽しく食べていました。その光景が今でも私の脳裏にくっきりと浮かんできます。本当にありがたう……そして両親が年老いてきましたので土居に帰り、田畑の一切を勤めの傍ら、よく管理してくれました。コツコツとお金を貯めては農機具を買い、ガレージを建てたり、一生懸命働いては息子の成長を何よりも楽しみにしていましたね。テレ



ビの画面に津山が映ると大層喜んでいました。(息子が津山在住)  
大変静かな人でしたので、今でもベッドに居るように思えてなりません。いつも花のこと、星のこと、二人で話していたのに、もう何も答えてくれません。よく注意もしてくれましたが、今はもう何の返答もありません。涙がすぐ出てきます。これからは一人で頑張らなくてはと自分に言いかせています。  
本当にありがたう。

## 引揚船「長運丸」に乗って

黒石貞子

昭和二十二年二月八日、私たちが住んでいた青雲台の住民は、大連港に集結することになり、一人二個の荷物を持つことが許されました。何もない私は、親戚の荷物運びとなりました。何番埠頭であったかは記憶に残っていませんが、収容されてから一番に、検疫風呂に長い時間浸っていました。それと言うのも、終戦以来、風呂に入るのにも水・燃料などの都合で数える程しか入っていないだったので、白い葉の匂いのする湯に首まで浸ると、ポロポロと垢は落ちるし、四方に監視員が立っていて随分恥ずかしかったのですが、やっと帰れると思って堪えていました。

十一日の乗船までに荷物検査があり、小母さんは指輪などの小物は髪の中に結び込み、貴重品はお金を握らせて通してもらいました。船のタラップを登る時には、大声でロースキソルダートスパイボバリシヨイと手を振りました。長運丸は油送船で船倉は一つ、甲板は荷物置場でしたが、畳一畳程に五人がいました。トイレに行くと、自分の居場所はなくなりました。男の人は、持ってきた水筒に用を足して家族に捨ててもらい、場所を確保していましたが、私は居候で仕方なく、甲板の荷物を一つ動かしてその穴に入り、空ばかり眺めての何日間でした。途中、アメリカの

魚雷に遭うかも知れないからと、ゆっくりとした航海でしたが、やれやれ帰れると思つた途端に緊張の糸が切れたのか、船の上で何日を過ごしたのか憶えていません。

佐世保に一週間留めおかれ、我家に辿り着いたのは二月二十八日でした。短いようで長く苦しんだ私の青春の一頁でした。



手芸 原田豊子

# 流転の細い道

岡 出海

—プロローグ—

長年に亘る放蕩生活と不摂生により、網膜を痛め、全盲。さらに、血管極めて不自由な身となりました。両親から貰った健康な体、このようなことで目と足の機能を失いましたが、幸いにも、生命だけは生きながら得る体となりました。

二人の子供達には、小学生の時から人生に対する取り組み、生き方を、折に触れて教えてきましたし、その後、私の生き方ができるようになり、私の背中を見てきておりますが、孫達に対して多少なりとも、伝え残しておきたい思いから、細い道であつ

ても、我流転の自分史なる物を書く気になりました。拙い文章でしょうが、目を通して頂ければ幸いです。

私は敗戦濃い昭和十九年三月末に誕生し、我家にとって明治四十一年以来の男子誕生でした。農家の第四子、長男としてこの世に生を受けました。戦前生まれと言っても、戦後生まれと同じようなもので、まさに、戦争を知らずに育った一人です。

—幼き頃—

近まわりに三歳年上がいましたが、さらに五歳上の兄がおり、年下には目もくれず、私が年長者で四、五人で仲良く遊びました。遊びと言っても何の玩具もなく、いろいろ考えて遊

びました。小鳥を取ったり、水鉄砲や、すす玉・杉の実の鉄砲で、又、雪の日には、竹スキーで遊んだところでした。つつじの咲く頃、姉達と、母親が作ってくれた弁当を重箱に詰め、花見に行ったのも楽しい思い出です。

思い出の花見の地も、今は工業団地になり、久門奥の地は、今や道もなくなっているのではないかと思えます。秋祭りには、神社で奉納相撲や、又、豊作にお礼する、いのか祭りもあり、小学校一年生から中学三年生まで、祝儀のお金を等しく分け合ったのも時代だったのでしようか。

次号にも、後を続けたいと思えます。



# 歴史紀行

大きなでかいと

些細な歩み

みな

人間の歴史

かたりべとなつて

伝えよう

の笑い  
の邊む

書道 北村永子



# 古代美作「勝田・英田郡」の素描 地名・海部・和気氏等からのデッサン 加藤 芳英

便宜上、「大和王朝」を、順次「神武」「崇神」「応神」「継体王朝」と四つに時代区分をなし、古代「勝英」像をデッサンする。

「神武王朝」は、隼人・宇佐（秦人）・吉備の海人を主勢力とした。「崇神王朝」末の仲哀天皇は、熊襲（隼人）との戦陣で急死し、残った神功皇后と武内宿禰（蘇我氏の祖）は、隼人・吉備連合軍をベースにして大和の仲哀子息（忍熊）を滅ぼして、河内に「応神王権」を確立させた。応神をトップに戴く勢力は、長江流域より、南九州に住む隼人（マレー・ポリネシア・苗族・クメールの混血）先住地に渡海して来たものと考えうる。

「応神王朝」の二代目仁徳天皇が、吉備海部直の娘・黒日売（黒媛）を、吉備の「山方」にまで追って逢瀬を重ねたことが『記・紀』に書かれている（AD400年頃、千六百年前）。

「山方はウチだ」と名乗った所は①津山の昭和池山方②勝北新野山形③和気の佐伯山方④赤磐是里大宮山（宗形神社）等だった。

倉敷や牛窓等が、吉備海部の基地港だ。吉井川を上って上斎原へ。東津山・加茂川を上って阿波へ。吉野川・梶並川を上った渡来人（勝部や海部「海氏」等）があった。

和気氏の祖「弟彦王」（垂仁天皇王子鐸石別命の三世孫）は、仲哀の子等

を破った功績により、藤野・石生郷などが与えられ、美作の山部境域の鉄・銅・水田開発担当の中核に任せられた。「月の輪古墳」（三世紀末築造）は、和気氏先祖の墓なりと主張する歴史家故・仙田実氏等）があった。少し北方の勝田郡内に「和気郷」があり、タタラ遺跡も出た。

勝田郡は、弟彦王に率いられる秦人（勝部）の開拓植民地。勝部田（カチヘタ↓カツメタ↓カツマタと転訛）勝部（カチヘ）の土着田園の義。と言う人は「岡山県通史」著者永山卯三郎氏であった。「合併記念・勝田郡誌」（昭和三十三年）は、永山説を採用している。

英田（英多）郡の由来は、漢部田（アヤヘタ↓アヤタ↓アイタと転訛↑永山説）県（アガタ）から由来すると説

く者もあり。英田郡大領に長く財田氏が勤めた。日向の財部、備前・讃岐の財田の連関を明確にする必要ありだ。

海氏の地名 ↓ 三海田、海内、海田、南海、（佐用町の）奥海、海内は、吉野川水系を上った吉備海部の定住開発の名残りでないか。

隣県の播州（聖徳太子や秦河勝の製鉄等の）開発や智頭・因・伯・雲州との交流増大や、公地公民制の崩壊などが英田郡の北部が分れて吉野郡が成立する要因だった（成立時期不明）。

（奈義に）豊沢、豊田、豊並、（美作市内に）豊成、豊野、豊田、豊国原、（勝央に）豊久田、豊中という「豊」字地名あり。用明、推古、（聖徳太子）、皇極、孝徳、斉明、文武、元明、聖武、

孝謙、称徳の各天皇にのみ、「漢風諡号」（おくり名）の中に「豊」字が入っている。飛鳥時代↓奈良時代に、天皇家直轄的な鉄・銅等開発が本格化したのでないか。（吉備の屯倉五ヶ所

歴史の探索は、推理と仮説から始まる。

数年前に、地元のある地名の由来について調べたことがある。その地名は、後醍醐天皇が通過される時に付いたと言う伝説があるが、伝説を裏付ける証拠がない。

更に調べていくと、過去にも同様の行列がこの美作地方を通過し、隠岐に向かったことを知った。

## 発想の転換

井上 健一

設置の中の一つかも知れない。日本全体の人口は縄文晩期は七万六千人、奈良時代四五万三千人（四八%が渡来人）という学者推計あり。（乞御批判、御教導）

それは後鳥羽上皇の一行だ。

更に、二組の天皇行列の経路に関して、南進説、北進説という論説があることも知った。

そこで、各地の伝説を調べてみた。もしかすると、二組の行列が交叉しているのではないかと考えた。

私は、以前に仕事で旧美作町内を毎日駆け巡っていたので、比較的、地理には詳しい。

古来の道は、谷から頂上に通じ、尾根伝いか、川沿いを通っている。川土手が低くなり、瀬になつてゐる場所から対岸に渡つてゐた。

このように考え、地形と、伝説や伝統、祭事等を重ねると、ある場所が浮かび上がった。

旧美作町の朽木と榎原下を結ぶ古道があるのではないかと考え、朽木

の人に尋ねた。すると驚くべき答えが返つて来た。

私の予想通りの古道があり、山頂付近で後鳥羽上皇が休憩し、湧き水を飲んだと言う伝説もある。

しかも伝説の場所に祠があり、朽木と榎原下で七月二十日過ぎに祭りが行われていたそうだ。朽木から榎原下方面に下ると、目の前に梶並川

の瀬渡りの場所がある。対岸は豊国地区である。

一方、百十年後の後醍醐天皇の行列が、逆方向からこの場所を通過したのか、新たに出来た川沿いの道(現在の道)を通過したのかは、定かではないが、吉野川と、梶並川の合流点には、着いたようである。

対岸は湯郷地区である。

## 出雲往来と江見の橋

安東靖雄

昨年、出雲街道について調べた時、幾つか新しいことがわかったので書き残しておく。

江見の吉野川に渡し舟ができたのは寛永十八年である。この年の川崎村年貢免定(年貢割付状)に、渡し

舟ノ代銀として飯岡村六兵衛へ渡す分四石五斗を年貢から差し引く、とある。この年、渡し守給米二石を支給している。年貢米から渡し舟の代銀と渡し守給を支出したから渡し舟は藩が作ったことになる。

元禄十一年「川崎村寅之御改差出帳」には、  
一 渡船老艘 当村ノ江見川ニ御座候。  
先御領主様より給米式石下され候。  
當村百姓渡し仕候。仕立入用も先御領主様下され来候二付、渡ちんハ何れよりも取り申さず候。  
とある。渡し賃は無料だった。  
この帳面には橋についての記述が

ある。

一橋 壹ヶ所長三拾五間 横巻間  
是ハ当村ノ内江見川ニ掛ケ申候。

西国御大名様方江戸え上下の往還

ニテ御座候。先年より近村寄合かけ申候。毎年九月より明ル四月末迄かけ申候。

橋が架かった時期は「先年」とあるだけで、はっきりしない。元禄十一年以前の遠くない時期であろう。川については同じ帳面の「川之事」の項に、川幅三十五間ほど大川と申候、とあって、橋は水流の所だけで河原部分は歩いたというものはなく、川幅全体に架かつてゐたことがわかる。

また、松平出羽守様(松江)御通之節ハ当郡土居村へ馬出し申候。并当村江見川え川越人足出し申候、同上野介様(松江支藩出雲広瀬)御通も右

に同じ。因幡少将様(鳥取池田)御通之節ハ吉野郡古町村へ馬出し申候、とあって、「助郷」という課役があつた。

文政十一年五月廿六日の津山藩「町奉行日記」に次の記事がある。参勤交代の帰途、土居に泊つていた津山藩主の一行は江見川が川留めで「御渡川相成り難く」なつた。午前十時ころ迄に渡れる目途がつかなければ

## 壇ノ浦の戦いで、海に沈んだ安徳天皇は 替え玉だった

宿野喜一

寿永四年(一一八五年)、源平合戦最後の戦いとなつた壇ノ浦の戦いで平家の滅亡が決したとき、僅か八才の幼帝安徳天皇は、祖母二位の尼(清盛の妻)に抱かれて海に沈んだ。

平家物語などで語られる安徳天皇の死には異説がある。安徳天皇は、海に沈み、遺骸が確認されていない。それなら壇ノ浦で死なずに、その後も生きていたのではないか。そんな疑

いを裏付けるかのように、安徳天皇の生存伝説は各地に残っているのだ。

特に生存伝説の多いのは四国で、阿波の東祖谷栗枝渡の伝説は有名です。それによると海に沈んだのは身代わりで、本物の安徳天皇は讃岐の屋島から栗枝渡に逃れて、翌年この地で亡くなったという。また、鹿児島県の硫黄島の長浜家に伝わる「硫黄大権現宮御本縁」という古文書では、身代わりとなったのは大納言平 時房の七才になる娘だったとも言われる。本物の安徳天皇は平 資盛らに守られて日向灘を南下し、種子島を経て硫黄島に上陸して六十八才まで生きた。長浜家の当主はその子孫だという。

隠岐の島にも安徳天皇生存伝説があり、二位の尼や平 知盛らに守ら

れて隠岐の島に上陸した安徳天皇は、三年後に病死したということになっている。安徳天皇の墓と伝わる御陵墓は驚くほどたくさんある。

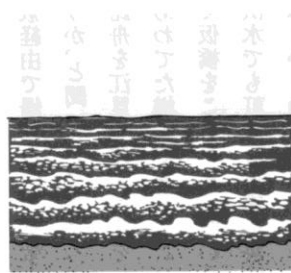
壇ノ浦で入水した遺体を見つけて葬ったという伝説を持つ墓と、壇ノ浦の戦いも生き延びた後、葬られたと言う伝えが残る墓とを合わせると全国で十七ヶ所にも及ぶ。そのうち五ヶ所は、宮内庁によって安徳天皇御陵墓参考地に指定されている。

さらにこの外にも、研究者や作家などが別の視点から安徳天皇生存の可能性を指摘している。例えば鎌倉幕府の公式記録「吾妻鏡」では安徳天皇を抱いて海に身を投げたのは按察局とされている。その按察局は源氏方に救助されているのだ。それなら、按察局に抱かれていた安徳天

皇も救助されたのではないか。そんな疑問も浮かんでくる。

NHKの大河ドラマ「義経」や、その原作者 宮尾登美子の「宮尾本平家物語」では、安徳天皇は同行していた異母弟の守貞親王と入れ替わったという設定になっている。このように別人になりすましてどこかで生きていたと言う可能性も考えられるだろう。

いずれにしても、さまざまな想像が湧く安徳天皇の行方である。



# 短文芸

生きている

あかしとしての

自分の思いを

自分の言葉で

表現する

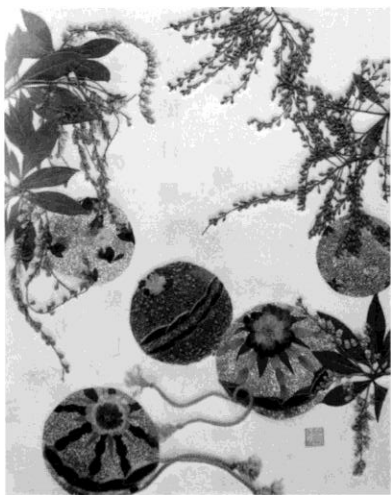
その表現が

万人の魂を

ゆり動かす

短文芸の力

伝統文化の力



押花 河 股 満寿子

# 俳句

アカシヤの花

江見英雄

いさぎよき武人でありし我が師かな  
亡き母の念願果し墓参せり  
子の助け展墓すませり恙なく  
恙なく帰れ雷なる通学児

初詣

春名静山

拝殿の裸電球初詣  
あたたかや腕を支へてくれしひと  
たんぼぼ野どすと坐る癖のつき  
渡り来し紋付鳥の礼上手  
小豆選る膳に擬音の波の音



江野子 美富 井川 井 樽石 福 手芸

葱

春名波留夫

対岸の畦を這ひゆく野火速し  
葱の香や土のにはひもしのばれて  
棚田植うお地藏様に見下ろされ  
頂上は播美国境若葉風  
紫陽花や黒雲落つる日本海

巢立ち

山下照夫

愛き孫の次々巢立ち春侘し  
待ち焦がるる初燕来て卯月なり  
行楽も「インフル」流行り足留めに  
先輩の入院ありて藤散りぬ  
身重鹿毘に掛かりて尚愛し

選挙戦

加藤美雪

冬物に日毎変わりて福祉バス  
枯木かと思ひし木々も冬芽あり  
お雛さま重ねぎしても雅びやか  
長閑なる山に響きて選挙戦  
若葉道海眺めつつ続きゆく

春の川

青山元江

恙なく老の事足る四温かな  
つばめ来て一人の住居動きだす  
垣の無い嫁との会話日脚伸ぶ  
春の川余生流れに添う如し  
看護師の明るき笑顔梅雨最中

## 紫陽花

樽井悦子

紫陽花の白き玉より色変り  
霧立ちて雨にゆれてる七変化  
紫陽花の庭一面の三浦邸  
白百合の香り高しや雨の朝  
落雷に耳ふさぎおる姉妹かな

## 物忘れ

杉本幸子(土居)

大寒や上らぬままの温度計  
寒き夜粕汁の匂い室に満つ  
独り居て鍋をつつきて侘しかり  
春うらら日々物忘れ多くなり  
半夏生鉢植トマト熟れ始む

## 茄子

樽井清江

霧のほり黒き山並動きだす  
草の葉の足にまつわる露の玉  
窓たたき飛び散るひようや大夕立  
もぎたてのトマト夕餉に彩を添え  
不揃いの茄子の輝きふるさと便

## 梅雨

坂井はつ子

夕顔が宙をまさぐる闇がくる  
切先のぶき光や梅雨の太刀  
夕立くる船越山を掻き消して  
堂内へ闇呼ぶ梅雨の一乗寺  
山栗はあり処を示し咲き盛る

## 母子

山本靖子

幾年や越えて今ある桜の芽  
長閑なる野辺に花摘む母子あり  
浮草に暫し憩えるほたるかな  
秋祭り法被姿の小さき背よ  
朝霜を踏んで小石も靴の裏

## 鈴虫の夜明

森本久子

朝光や草に沈みし夜の蝶  
鈴虫の夜明の声や風に消え  
夕風の声呟ぶきて蛙跳ぶ  
雨蛙よせあう雲に急ぎ啼く  
玄関に朝蜘蛛糸引く良き日かな

## あさなぎの

沖田はるみ

巫女たちの稚き指し手花の舞  
産土神へ五穀の種の献ぜられ  
あさなぎの海や朱なる大鳥居  
黄金濃き穂垂の中の御神輿道  
亥の子つき美しき色紙風の舞

## 道

真野雅子

三が日過ぎて一人の静けさに  
初音きき夫の碑洗う七回忌  
地に若葉天に衛星人の居り  
炎天に今日もさらされ農と生き  
嫁ぎきて晴あり雨あり半世紀



若葉

井口祥子

リュック負い歩く人あり若葉燃ゆ  
ときめきて友と再会花の下  
めらめらと大蛇の如く野火走る  
重ね着の我に黒猫すり寄りて  
亡き母に思い馳せれば螢来る

新緑

坂部金治

細々と鳴りを潜めし冬の滝  
風誘ふ黄金の落葉宙に舞ひ  
秋時雨土と暮せし幾歳か  
新緑や水面に星の影映す  
野菜畑舞ひつ休みつ秋の蝶

四季折々

青山美和子

野火終えて休む暇なし農夫の手  
畑仕事腰を伸ばせば遠霞  
山寺の古堂に揺れる風若葉  
村はずれ笹百合一本石地蔵  
夕立を受けて生き生き野辺の花

労りつつ

山本登山

冬芽立つ雑木に色のありにけり  
長閑さや労りつつ行く老夫婦  
春暁の峰黒々と続きけり  
野火走る見守る人の声高し  
螢火の流れに揺らぎおりにけり

# 川柳



日本画 円東千歳

向日葵

春名静山

向日葵に元気を貰う日の盛り  
大地踏む軍靴の音も遙かなる  
来し方を音符に書いた浮き沈み  
御僧と並んで座る歳となり  
老妻と秋刀魚一匹焼く暮し

独り居

江見英雄

七年の回忌すませてホツとする  
独り居の屋敷畑を草がせめ  
生きて居るしるしなりとて物を書く  
何くそと元気ばるとも足弱く  
九十五年生き父の倍越えにけり

## 外国頼み

山下照夫

大相撲外人力士大威張り  
御見舞を書く手も細る土用かな  
愚息めが家買ひ脛は極細に  
アメリカの不況律儀に我家にも  
平和への道拡げてよオバマ様

## 月日重ねて

坂井はつ子

たまさかに勝たせてやるか口喧嘩  
アツシーでと常言う夫のてれ笑い  
朝夕に頬張って飲むタブレット  
夫の手をセクハラかなと思ふ虫  
二人とも帰る実家がなく平和

## 飾る

山本千恵

人生に花もそえたし夢飾る  
わが孫へ心を飾り伝言す  
秋飾る運動会の輪に入る  
秋祭りこし見る人かつぐ人  
夫婦にも飾る言葉が時にいる

## 鉄扉の中

山本登山

甘い汁吸って鉄扉の中に居り  
背かれてなお未練引く影を追う  
まとまらぬ話に酒が減ってゆき  
呆けよると言われて「九九」を言つて見る  
縄暖のれん簾出れば見て居る宵の月

## 手紙

山本昌子

ポケットにしまった便り夜に読み  
誤字だらけだけど温みのある便り  
うそ少し詰めて便りに封をする  
置き手紙言えない事を書きつらね  
断りの返事が出せぬ義理もあり

## 母の顔

新免三代

母が来てお国言葉の弾むとき  
よそ行きの化粧がはげて母の顔  
ふんわりの気持ちになれる古女房  
忘れてもわたしゃあなたのメモ帳だ  
悲しいと二人は向こう見て話す

## 明日も晴

原 幸子

方言でお茶を濁して笑いけり  
静かなり尼僧は笑みて道を説く  
軽いとは言うまいものぞ人の口  
長雨に婆さん空を恨んでる  
万歩計歩く生きがい明日も晴

## 後期高齢者

名部和子

ほけ防止そんな帽子がほしいです  
朝覚え夜はわからず不安です  
老の意地余りとおすとたおれるよ  
流行は追わずにリフォーム支とする  
めがね拭くしぐさで泣いたあのことで

ふる里

遠藤 榮

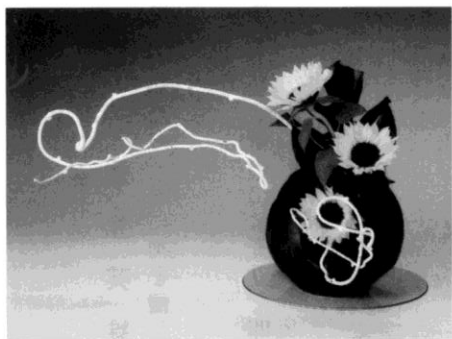
山柿も野いちごも食べ今があり  
薫風に 歎も 軽々 五月晴  
霧燃ゆる山を越えれば母招き  
漬物はやはり亡母の味となり  
赤とんぼ詩が流れて里近し

ホテルのスリッパ

名部 みどり

手の痛みなおったらずがうずき出し  
見たで見えたよみんな上向く欠け太陽  
歩きなさいと電話しといてもぐりこみ  
おじさんの政治の話も行きづまり  
気がついたらホテルのスリッパでバスの中

# 短歌



生花 中田 敏子

母

原 洋一

耐えること教えてくれた母の汗  
ちらし寿司母がふるさと提げて来る  
半分は女米寿の母の紅  
おろかなる母だが日本一の母  
妻を脱ぎ母を脱ぎして二度童衆



ちぎり絵 杉本 幸子

わが故郷は

釜田 玉枝

暮れなづむ山に山影移りつつ鹿の鳴く声谷渡りゆ  
く  
北遠く雪を被りて輝く山わが故郷はその麓なり

山峡に住みて居ながら山知らず今日は眺めぬ霞む  
山波

世の移り

春名 静山

山仕事なき世となりて「山の神」も一月九日も若  
きら知らず  
五十年友の営む履物店後継者なく町より消ゆる

遠き日の下駄屋の店の今はなく屋敷の跡に桐の花  
咲く

## たおやめの空の旅

江見英雄

たおやめが仙台薩摩空の旅ただ一筋に神を信じて  
村人の心にひびけ此の太鼓愛宕の山に登りて叩く  
命をば大事にせよと明暮に教えてかかれ何はとも  
あれ

## 同窓会

坂井はつ子

補聴器をターバンに隠し友だちにいざ会はむとて  
バスに乗りたり  
うきうきと古稀の集ひに来て聞くは誰や彼やの病  
歴計報  
なつかしみ同窓の友らと話しこみ嗚れし声にて別  
れをつけぬ

## すもも

加藤幸子

わが歯形つけたる李すももの青き皮真紅したたる果肉包  
めり  
人命に係はる事件日日ありき我は一匹蚊をたたき  
たり  
遥か見上ぐる山の頂きに家のあり城主の心地せん  
かと思ふ

## 発見し発心せよ

加藤芳英

身心の円成求め消すものと愛づるものとを分け歩  
まんか  
長き期の夢を実現さするには欲を抑へて勤勉であ  
れ  
人人の「防護林」こそ大学か寺社のごとくに「愛  
寿大」へと

## 大人のぬり絵

杉本幸子(土居)

亡き夫の郷土戦記の新聞の切り抜き綴るノート出  
で来ぬ  
母の日の宅配便の荷の中に大人のぬり絵も入つて  
いたり  
すれ違う人の会釈にあれれ今の誰方だったか思い  
出せずに

## 日食

山下照夫

吉井川居心地良しや白鳥はさつきになれど故郷へ  
帰らず  
二人して共に歩みし五拾年こまき子孫揃まじいて辛苦忘れぬ  
久久に皆で拝みし日食は尊厳にして真神まことなり

## 八十八夜

山下三代子

農婦われ「八十八夜」を聞きしより田植準備に追  
はるる日日よ  
天使のごと真白に咲ける白木蓮高きにありて我を  
励ます  
昨年こぞの母の日届きし紫陽花が今年も大きく真白く  
咲きたり

## 生きる

井口秀子

永遠に生きて死ぬなよと言う曾孫抱きしめて唄う  
「千の風になつて」  
燕つばきさえ帰りにくるにふる里は過疎となりいて墓は  
何思う  
冴さえわたる月の光に遥かなる山並みゆらりゆるる  
がに見ゆ

鴉

坂部 金治

空覆う梢に鴉が巢造りて今日は巢立か呼び合う親子  
田植来て子の助つ人や老い住い静けき住いに賑わうひと時  
畦道に伸びいる影を踏む足に驚く蛇よ我も驚く

梅 雨

松本 哲夫

米作りに今年も作る電気柵人と獣と知恵競ひあひ  
我が庭に鶯来たりて声すれど何処にぞ居る姿探すに  
梅雨空に紫陽花の花咲き揃ひ曇る気分も晴れ晴れとなる

せせらぎ

井上 智

わくらの葉をたたへてせせらぐ谷川の水を掬へばぬるみてやさし  
膝折りて顔つけ含む水うまし四温のひと日の谷の流れに  
降る雨に冬の草草ひと夜さに畑に青みて春草となる



写真 円 東 秀 章

折折に

名 部 和 子

年ごとに薄くなりゆく髪の毛を洗ひて友との小さな旅まつ  
スーパ―の入口のかべにゆれてゐる小さな白い靴の片方  
呼ばれたる気がして後ふりむけば携帯電話の人の声なり

里 山

安 西 苑

山山に春の雨降れば木木の芽は色を変へつつ山を色どる  
冬晴れに山の小道を歩みつつ落葉をふめば命あるがに  
里山の雪も消えうせ吹く風は肌にやさしく春をはこび来

母の日に

野 沢 老 梅

わが子とも思へし姪よりのカーネーション花の赤さが胸にとびこむ  
おくりこし「おかあさんありがとう」の文字あれば包装紙もたたみて戸棚に入れおく  
娘がくれし天然石のネックレス付くれば胸にしみこむきらめき

燕

藤 川 亜 也

初つばめ何を告ぐるか忙しくしやべり通じぬめと向き合ふ  
子育てに勤しむつばめを眺めつつ平成の世の乱れを憂ふ  
大安の佳き日に我家の子つばめは揃ひて巢立ち賑やかに舞ふ



老

光井房子

毎朝のいつも変はらぬ食卓がとても大切だと思へる八十路  
はやわが身八十路となりぬ老ゆれども短歌は常に心の友なり  
軒下につるす玉葱幾百連収穫よろこぶ八十路すぎても

棚田にて

大内佐智

そばの花白の群集今さかりにぎはふ棚田に人影もなし  
幾年を猪の出で来し山の田は荒れゆくまに猪の住み処ぞ  
老い我が先祖の畑見守らん雀の涙ほどの心意気にて

春暖

内藤慶子

旅立ちの春巡りきて万葉に詠まれし能登香の山をあとにす  
卯月八日箱の中からさつまいものぷつんと赤い新芽が覗く  
邪魔になる季節はづれの筍が折つても折つてもまたまた覗く

折にふれ

鳥形節子

過ぐる年笑ひし泣きしも夢のごと来む年こそは平和なれかし  
光うけ大地を踏みある嬉しさに今年の幸を信じてをりぬ  
光さし色とりどりの花花に春爛漫の能登香の里よ

同窓会

池田保子

浴衣着にくつろぐ古都の同窓会つきぬ語らひ夜は更けてゆく  
久びさに友らと巡れる古都の旅中学生に我ら化りゆく  
花がらの浴衣装ひて華やぎぬ同窓会の古都の宿にて

洗ひてくれぬ

清田三智子

枠となる網戸の中にをさまりぬあぢさゐはまさに絵画の如く  
真夏日は靴の音さへ暑くしてわが頼つたふ汗の多さよ  
若くして逝きにし夫なり歳月は流しし涙を洗ひてくれぬ

能登香

横林 富砂子

秋祭り子供神輿も無事済みて静まる村に夕暮れの鐘  
能登香の里刈田の上を白鷺のいういう飛びてのどけき夕暮れ  
家毎に亥の子を搗きて子供らは夜の道行く提灯持ちて



書道 山本千代子

## 初 燕

原 幸子

木蓮の蕾の産毛の優しさは春待つ君の思ひに似たる  
初燕の声聞きてより苗仕度良き苗作るは老いても  
楽しと  
夕闇に舞ひ来る蛍の緩やかさ若かりし日の語らひ  
のごと

## イミテーション

藤本伸子

老いの身に染みついてゐるこの鈍さ心細しよ厳し  
き人生  
帰り来し孫に幼き影すべて消え失せをりて若き毛  
脛よ  
我が指に妖しく光るイミテーションの立爪指輪う  
きうきとあり

## たのしみ介護車

森本久子

溪川のほとりにあまたも舞ふ光ほたるの群はいつ  
しかに消えゆく  
野は芽ぶき介護支援の車来て感謝の心春日のごと  
し  
介護車の窓より見れば蛇崩の小道のつつじも咲き  
はじめをり

## 大 山

名部みどり

若きは町のくらしにとかへり行き若葉の風にね  
ころびてみる  
花冷えに山門のうちに待ちをりぬ日時まちがへ  
しは露ほども思はず  
舞扇さかさにたてし形して大山はねむるか裾のみ  
ひろげて

## シューターゲーム

小林増代

すぎし日の一週間は短くてこれから先の七日は長  
い  
動かずに寝たきりになるのいやだから出来る限りの  
リハビリしをり  
もう駄目と思ふ心とまだまだと思ふ心がシューター  
ゲーム

## 折りふし思ふ

宿野和穂

柱にも垂木にもなる檜材先祖が見れば焚くを嘆か  
む  
親指の父似がつらく乙女子の我は憎みきこの蝮指  
田や山の財産要らぬと若者は言ひつつ只では人には  
やらずと

## 友と睦みて

有元理嘉子

媪らは七人並びて高岸の枯草刈りをり雪の舞ふ中  
葉牡丹を抜きて植ゑあるパンジーの春色明るし道  
辺明るし  
水仙が村の谷間を黄に染めて媪の夢を広げてくれ  
ぬ

## 雨の美と空の雲

梅本信恵

雨あとの落葉だまりの濡れ落葉滅びの色の冴え冴  
えとして  
ブロッコリーの葉裏にひそむ青虫を目をこらし捕  
る朝の仕事と  
青空へ尾を引くさまの飛行機雲茜の色は機の置き  
土産

夫よ

原田順子

冬生れし夫は春をば待てぬまま逝きてしまひぬ我を  
残して

「母さんは今日より未亡人」と娘が言ふを我は我武者羅に否定をするも

夫の遺品仕舞へば寂し出せばまた巡る思ひに心乱るる

一年生

新田千晶

空つぼのランドセルをば何回も開けては閉ぢてまた開く孫

新しきランドセルとてわれに見せ背負ひて振り向く  
く笑みいつばいに

だぶだぶの制服を着て燥ぐ孫いよいよ今日から一年生ぞ

笑顔信じて

横山美恵子

採血も二回終りて刻ごとく二十三日の手術日迫る

午前十時手術室へと入りゆきぬ担当医師の笑顔を信じて

同室の手術仲間は同年代痛さ忘れて戦後を語る

性のまま

横山昌子

紫陽花の枝の撓みて咲く花は濃きも淡きもその性のまま

風をうけ葉裏をかへして揺るる木木向ひの山は歌ふがごとくに

食べる事それが唯一の楽しみと夫はまた問ふ夕餉の献立

をさな子

加百 由起子

きな粉ともまぶせし砂をこぼしつつ庭にをさなを待つ泥団子

をさな子が「ほら」と指さす畔の端にたんぽぽの黄のほつこり温し

「押し入れにかくれてゐてねさがすから」四歳の孫とするかくれんぼう

残り香

小林洋子

翁来て吸ひし煙草の残り香は開け放せども消えざるまに

継ぎ接ぎの糸の垂れたるジーンズを纏ふ若きの流計れず

夏山の裾を飛びゐる白鷺はその身に余る姿にぞみゆる

白鷺

江見 眞智子

山法師が十葉の花をのみ込むがに霧は青田に魔法かけゆく

畑なかに蝗虫追ひかくる白鷺が啼き啼きかへるか  
何いぢめぬに

二十戸の部落は四戸の新盆を迎へていよよに限界集落

感謝

新免三代

各各に受話器の向うとはづみをり老い夫と我の声大きくて

当然の箸持て食ぶる夫の所作八十路の今は感謝に感謝

もう一度だけ元気にならうと言ふ夫に涙ばかりが流れて止まず

わが村

長澤 和枝

たんぼの競ひあるがに咲きつづき土筆が並ぶわが村の道  
村人と農業水路の掃除する鮭の小群にはしやぎながら  
粗がらを焼きある匂ひがただよひて収穫終へしのびやかなる村

吾が身のまはり

末宗 ちとせ

どんよりと朝曇りする空の色晴れぬ心のはげどころなし  
九十路すぐる隣の喜ちやんはわが夫を秀ちやんと呼ぶ兄弟の如く  
こま切れの時をつなぎて詠む短歌少し残れる脳裏の余白に

里山

加藤 保子

紅梅の花の匂ひを消すごとく終日降りつぐ静かなる雨  
をちこちに山桜咲き木木萌えて母の懐のやうな里山  
徐に異界に入る心地してしだけ桜の枝くぐりゆく

初蛩

森本 かよ子

一筋の青白き光が目の前をかすめてゆきぬ初蛩かも  
人声も車も途絶えし昼下り竹の葉一枚そよがぬ寂しさ  
柚子の香の満ちある湯船に浸りつつ心さやかに除夜の鐘聞く

花

黒石 登代

淋しいとは言はないけれどこの年の花もあなたと見た場所で見ると  
牡丹の青き蕾のほころびて朱のこぼれ来る女孫十六  
夫よりも生き長らへて十四年牡丹の蕾も数を増したり

茶のかをり

北村 和子

ぐつすりと眠れしことも馬鈴薯の揃ひて生えしも  
我のよろこび  
ふと洩らしし愚痴が独りで散歩して姿を変へて吾に戻り来  
茹で上げて乾せば芳し茶のかをり一年分のわが家の茶の葉ぞ

儂きは

黒石 貞子

儂きは人の命か逝きて六年夫の時計は健かにあり  
早苗田に風の生れ来て夕つ日に千波万波の光を反す  
決断の鈍き我なり悔みつつ見上ぐる空に雲一つ浮く



手編り 有元 可奈子

吾が老いの生きざま

新免 初子

すでにして老いはこの身ににじみしか泥付く鉄の  
錆の浮くごと  
笑ひ有り争ひありて六十余年夫との残年いかなる  
残生  
ひと本の針に託せしあの千人針吾は寅年歳数縫ひ  
き

夏

福島 美智子

潮が引く如くに人波途絶えたり陽炎ゆらめく真夏  
の午後を  
中空をほんのり照らし浮かぶ月裏の顔など見られ  
なかつたふりに  
大鍋に蕎麦茹でれば風生れてはつ夏の香を家内に  
運ぶ

旅仕度

船曳 文子

自らの死装束に選べるは夫の好みし御召縮緬  
旅仕度あれやこれやと揃へをり曾孫の写真も夫に  
見せむと  
自らの死装束を揃へをりあれもこれもとバスツア  
ーのごと

夏椿

中川 富美枝

前山まへの夏椿の花咲き初めぬ今朝三輪の花の白さよ  
手さぐりに馬鈴薯一つ掴みたり繁りし茎を分けて  
わが手に  
晴れ渡る空に洗濯物をなびかせて棚田に雨待つ友  
思ひをり

秋の光

阿部 すみゑ

土竜脅しが風に回りにて畑隅に秋の光を刻みてをり  
ぬ  
無器用に剥きある夫の震ふ手に梨の雫が秋を光ら  
す  
とぎれがちの会話を手話に筆談に繋ぎつなぎて親  
子の団欒

子

角 利津

初詣で妻と娘を従へて柏手打つ子を眩しとも見る  
得しものは息子娘とその家族暇なき五十年の月日  
重ねて  
何時しかに子に守らるる身となりて庭に紫陽花の  
青き滴り

思ひ出

角南 三津糸

思ひ出の引き出し開くる如くにもあの日の桜川辺  
に咲き初む  
君想ひ生くる暮しのつれづれに春くれば蘭夏くれ  
ば鮎  
生れしより波瀾万丈に生きて来て今綴りゐるは三  
十一文字よ

言葉

入矢 敏江

居ることを意識もさせず糸とんぼ不意に浮きたち  
去りて子のごと  
余つても足りなくつても採めるもと面倒なものは  
言葉か人か  
どのやうにいつどこで言ふ丸めてはまたこねてゐ  
る言葉と団子

## 春が来る

日下 智加枝

暮れてゆく小径にあまき風うごき梅の存在・夫の存在  
かそかなる谷の水音鳥の声菊咲一華は花閉ぢしま  
ま  
わづかづつ移る川底の砂が見えゆらゆら春が向う  
から来る

## 二人の気まま展

浜田 くに子

父は書を母は小物を並べ置く信用金庫の二階三階  
チュニジアへ持ち帰ると言ふ掛け軸は「鶴舞」の  
二文字太く大きく  
満たされて疲れて眠りにつきにける父母なり「二  
人の気まま展」終へて

## 未来を想ふ

徳野 富美子

つかまりてたちて歩みて吾の側により来る孫よ笑  
みて夢さむ  
祖父祖母も父をも知らぬ我なれど誕生日の孫には  
皆揃ひをり  
背負はざるる一升餅に泣きわめき筆を投げ捨て算  
盤持つ孫

## 曾孫

川崎 晃

曾孫は腹ばひとなり数キロの頭を上ぐるに重しと  
見えず  
曾孫の匍匐前進はいと早く足の親指に肉刺<sup>まめ</sup>ができ  
たり  
曾孫の運動のはげしさに目を見張りこれから大変  
とひいぢぢの憂

## 渚の院

三浦 智江子

青き鳥の飛びゆく方を追ひてゆく禁野の跡を行き  
つ戻りつ  
捕りし魚を嘴<sup>は</sup>より嘴に受け取りぬ枯葭叢に婚約成  
りぬ  
鷹狩りの親王<sup>みこ</sup>の駆けしほどの辺り渚の院も茫茫と  
して

## また闇を呼ぶ

関内 惇

若者の住まざる村の篁に憑りゐる闇がまた闇を呼  
ぶ  
山並をなべて隠してたつ霧に老いらの村も天に繋  
がる  
さいさいと雨降り来たればさいさいと散りゆくも  
みぢよ思い切れよと



洋画 遠藤 栄



## 作東文化協会 グループ紹介

部名	グループ名	種別	代表者名	指導者名	例会	場所	展示会等	作東文化協会会員			合計
								作東地区内	作東地区外	協会未加入者	
書道部	1 白雲書道会	書道	北村福作	里見明	月2~3回	作東公民館 里見明先生宅	白雲書道会展	26人	12人	人	38人
	2 阿部書道会	書道	真野みよ子	阿部雲魚	月2回	岡山市北区伊島町阿部雲魚宅	県北展等	8			8
絵画部	3 作東水彩画教室	水彩画	妹尾美智子	竹中信清	月1回	作東農村環境改善センター	春の絵画展(作東・神戸・明石交流展)	11	2	1	14
	4 作東油彩画教室	油彩画	妹尾美智子	竹中信清	月2回	作東農村環境改善センター	春の絵画展(作東・神戸・明石交流展)	14	3	1	18
	5 さつき会	日本画	寺師喜代美	井上美智江	月2回	作東公民館	毎年2月に予定	10			10
	6 墨絵教室	墨絵	小林艶子	岩本敏子	月2回	J A勝英作東支店土居営業所	土居小学校・プラザ	8			8
	7 彩の会	絵手紙	木南節子		月1回	作東公民館 瀬戸コミュニティハウス	郵便局(吉野・粟井・土居)、きんちやい館	7			7
	8 すみれ会(絵手紙)	絵手紙	谷口翠	岩本敏子	月1回	岩本先生宅	土居小学校・プラザ	10	1		11
	9 吉野ハピネス(絵手紙)	絵手紙	横山富姫	竹内まり子	月1回	吉野公民館	美作市東吉田の宝妙寺で年2回(2月・5月)	3	2	2	7
園芸部	10 (山野草)園芸部	山野草	加百よし子		年17回	西大寺・津山市・奈義町 吉野小屋体・きんちやい館	県北山野草展(奈義町の駅) 吉野地区文化展(旧吉野小屋体) きんちやい館	12	1		13
	11 (盆栽)園芸部	盆栽	青山巖	(姫路市)白鷺園園主	年3回	①勝央町ファーマーズ ②奈義町 二宮氏宅	勝央町ファーマーズ展示場	4		9	13
茶華道部	12 ひまわりの会	華道	中田敏子	長家清甫	月2回	作東公民館	月2回 公民館玄関に生花を展示	14			14
	13 長家社中	茶道	谷本津多江	長家宗春	月2回と 月3回	作東公民館と長家宅	9月お月見茶会、ふるさと祭り	9			9
	14 お花を楽しむ会	華道	香山秀子	杉本幸子	月1回	福山公民館		9			9
文芸部	15 英北短歌会	短歌	横山猛	関内惇	月1回	作東公民館	プラザ展示2回・きんちやい館展示4回 新聞発表毎月	15	8	1	24
	16 能登香短歌会	短歌	名部みどり	関内惇	月1回	作東老人福祉センター	プラザ年2回・新聞発表2月に1回	16			16
	17 吉野短歌会	短歌	新免三代	関内惇	月1回	吉野公民館	吉野支部文化展年2回・プラザ展示年2回 きんちやい館展示毎月1回・山陽新聞発表毎月1回	12	3		15
	18 山家川俳句会	俳句	山本登	小島宇人	月1回	福山地区福祉センター		14		1	15
	19 作東川柳同好会	川柳	山本章	原洋一	年12回	作東総合支所会議室	新聞発表(年6回)	15			15
	20 Labo子ども英語	国際交流	原田郁子	原田郁子	月4回	旧吉野幼稚園(さくら組)	毎年11月岡山で発表会・美作市内で年1回発表会	6		7 (こども)	13
歴史部	21 歴史地名研究会	地名研究	新田祐之	固定した指導者は、 なし。地域の高齢者 又は郷土史家	月1回	作東公民館ほか 地域の集会所	展示活動は行わず	18	3		21
	22 古文書を読む会Ⅰ	古文書	山本章	安東靖雄	月1回	作東総合支所会議室	視察研修	11	2		13
	23 古文書を読む会Ⅱ	古文書	山本進一郎	安東靖雄	月1回	作東総合支所会議室		7	3		10

## 作 東 文 化 協 会      グ ル ー プ 紹 介

部 名	グループ名	種 別	代 表 者 名	指 導 者 名	例 会	場 所	展 示 会 等	作東文化協会会員		作東文化協会未加入者	合 計
								作東地区内	作東地区外		
写 真 部	24 写真同好会写友	写 真	小坂田 貢	小 玉 司	年5~6回	撮影地(場所不定) 写真のこだま店内(スタジオ)	プラザ展示・兵庫佐用応募	11人	3人	1人	15人
芸 能 部	25 吉野ハピネス	大正琴	小 林 範 子	富 永 仁 美	月2回	吉野公民館大広間		13	1		14
	26 琴伝流大正琴あずさの会	大正琴	岩 本 敏 子	藤 谷 守	月1回	J A勝英本店	県大会・西日本大会・その他近県演奏会参加	6	5		11
	27 早測流剣詩舞道	剣 舞 詩 舞	石 川 八千代	安 原 鯉 舟	月6回	作東公民館		7	1	2 (高校生)	10
	28 作東吟詠愛好会	吟 詠	光 辻 猛 美	衣 簀 義 文 井 口 敏 磨	月2回	作東、土居、吉野公民館 作東老人福祉センター		37	2		39
	29 コール作東	コーラス	山 本 文 子	池 田 直 美	月2~3回	作東公民館		22	1		23
	30 舞 踊 の 会	日本舞踊	井 上 美智江	溝 口 樹 香	月3回	作東公民館		7	1		8
工 芸 部	31 作東がんびの会	ちぎり絵	名 部 竹 夫	名 部 竹 夫	月1回	粟井教育集会所	プラザ・アルネ天満屋	30			30
	32 江見ちぎり絵教室	ちぎり絵	大 崎 安 江	杉 本 幸 子	月1回	作東公民館		5	2		7
	33 福山ちぎり絵教室	ちぎり絵	青 山 美和子	杉 本 幸 子	月1回	旧福山地区センター	「山の学校」毎月展示	5			5
	34 フラワー工房JUN (押花教室)	押 花	山 本 淳 子	山 本 淳 子	月1回	J A勝英作東支店	ファーマーズ押花合同作品展&体験会	6	5	34	45
	35 押絵ちぎり絵むつみ会	押 ちぎり 絵 絵	山 本 津多江	山 本 津多江	月2回	横林集会所	プラザ・土居小学校	10			10
	36 フラワー工房JUN (山の幸染め教室)	染 物	山 本 淳 子	山 本 淳 子	月1回	小房コミュニティハウス	ファーマーズ山の幸染め合同作品展&体験会	6	4	26	36
	37 たんぽぽ工房	機 織 と 手 仕 事	小坂田 尚 子	福 原 朱 美	月1~2回	旧吉野幼稚園	作東吉野さんちやい館で年3回・吉野地区文化展他2回 美作市北山津山信用	7	7		14
棋 道 部	38 双山囲碁クラブ	囲 碁	横 山 廣 志		月4回	粟井教育集会所	年3回大会 こども囲碁教室(月2回 市民センター・作東公民館)	24		40	64
情 報 映 像 部	39 お達者ねっと倶楽部	インターネット	鳥 形 初 美		月2回	インターネット 接続可能な場所		9	1		10
手 芸 部	40 妹尾さと子編物手芸教室	手 あみ 各 種 手 芸	妹 尾 さと子	妹 尾 さと子	月4回	作東公民館 船曳文子宅		12			12
	41 ピーズを楽しむ会	手 芸	妹 尾 さと子	西 坂 暁 子	月1回	作東公民館		12			12

488人 73人 125人 686人

# 平成20年度 作東文化協会事業報告

## 【全体事業】

年	月	日	事業名	内容	容
20	3	23	作東文化協会総会	バレンタインプラザ	
	4	15	第1回理事会	事業計画、会員募集、研修旅行、文化誌編集委員会について	
	5	16	文化誌編集委員会	編集委員長選任、編集方針について 以降4回開催	
	6	6	第2回理事会	研修旅行、文化誌原稿募集、秋の文化展、文化発表会、「文芸家の小径」について	
	7	4	「文芸家の小径」設置委員会	「文芸家の小径」設置の基本方針について 以降2回開催	
	7	20	研修旅行	兵庫県 淡路方面	
	9	19	第3回理事会	秋の文化展について	
	10	9	文化誌34号発刊	全会員に配布	
	11	1	秋の文化展	海苔センター 各部及び一般 ～2日	
21	1	23	第4回理事会	美作市文化連盟文化祭作品展、文化発表会、総会について	
	3	10	第5回理事会	総会について	
	3	22	文化発表会	バレンタインプラザ(芸能部)	

## 【各専門部・支部活動】

年	月	日	部名	内容	容
20	6	17	江見・豊野支部	江見・豊野合同評議員会	
	11	16		江見・豊野合同研修旅行(京都平等院等)	
	6	17	土居支部	土居支部評議員会	
	9	13	福山支部	役員会	
	12	9		福山支部研修旅行	
	6	15	粟井支部	評議員会 年3回	
	10	11		春日歌舞伎公演 ～12日	
	11	11		粟井支部研修旅行	
	4	6	吉野支部	里山歩き	
	6	14		吉野支部評議員会 年3回	
	10	10		吉野支部文化展 ～13日	
	11	16		吉野支部研修旅行	
	9	16	書道部	白雲書道会 白雲書道会展 作東美術館特別展室 ～18日	
	5	3	絵画部	油彩・水彩 第15回春の絵画展 作東美術館常設展室 ～6日	
	9	9		岡山県美術展参加・勝山いいとこ見つけた展参加	
	4	16		日本画/淡雲会日本画作品展(奈義町現代美術館)・県北美術展(アルネ4階)	
	7	16		倉敷院展・春の院展(岡山)・一年間反省の茶話会(プラザホテル)	
21	2	21		さつき会作品展(美術館特別展室) ～28日 他	
20	4	4		水墨画・佛画・俳画・絵手紙/プラザ東側展示・土居小学校展示	
	4	6	園芸部	山野草/都市との交流里山めぐり・紅花山シャクヤク祭り・山あじさい祭り	
	7	4		県北山野草展 ～6日・農山村生活交流グループ50周年大会に展示	
	10	12		出雲街道フェスタに参加 その他 交流会・講習会等開催	
	4	12		盆栽/技術講習会(松柏数・雑木草月)・展示会(ファーマーズ) ～21日	
	10	3	文芸部	短歌/プラザ東側展示(2回)	
	8	3	写真部	プラザ東側展示 ～29日	
	11	13		佐用郡展出品	
	10	3	芸能部	芸能部役員会 年3回	
21	3	22		第4回作東文化協会文化発表会	
20	4	19	工芸部	押花/押花合同作品展&体験会(ファーマーズマーケット) ～20日	
	8	1		押花&ガラスファイアーレインストラクター展(美作郵便局) ～15日 他	
	9	6		山の幸染め/山の幸染め合同作品展&体験会(ファーマーズマーケット) ～7日	
	4	20	棋道部	双山囲碁大会 年3回	
			書道部	白雲書道会/作東公民館 里見明先生宅 月2～3回	
			絵画部	阿部書道会/阿部雲魚先生宅 月2回	
				油彩・水彩/環境改善センター 月1～2回	
				日本画/作東公民館 月2回 9:30～	
				水墨画/毎月第1・第3火曜日	
				絵手紙/毎月第3木曜日	
			園芸部	山野草/きんちゃん館 年13回	
			茶華道部	盆栽/年8回	
				華道/月1～2回	
				茶道/月2～3回	
			文芸部	短歌(東北・能登春)/各 月1回、新聞発表(毎月)	
				短歌(吉野)/月1回、新聞発表(毎月)、吉野支部文化展	
				川柳/偶数月 第1木曜日 例会 俳句/月1回	
			歴史部	歴史地名研究会/月1回	
				古文書を読む会I・II/月1回 作東総合支所会議室	
			写真部	撮影/反省会	
			芸能部	吉野ハピネス、琴伝流大正琴あずさの会、作東友入琴楽会、早瀬流刺し舞道	
				作東吟詠愛好会、コール作東、舞踊の会/月1回～月6回	
			工芸部	ちぎり絵/月1～2回	
				押花/毎月第4火曜日 JA勝英作東支店	
			棋道部	山の幸染め/毎月第1月曜日 小房コミュニティハウス	
				囲碁交流会/毎週月曜日 粟井教育集会所	
				美作市囲碁連盟/お好み囲碁対局・高齢者囲碁教室・子ども囲碁教室	
			情報映像部	インターネット講座 第3木曜日	
				お運営ねっと倶楽部/パソコン講座 第1木曜日	
			手芸部	編物/月4回、レース/月1回	
			各専門部	プラザ東側、美術館展示	

## 【連盟事業】

年	月	日	事業名	内容	容
20	6	22	美作市囲碁大会	美作市囲碁連盟/農村環境改善センター 年2回	
	9	23	美作市文化連盟絵画展	絵画部/作東美術館常設展室 ～28日	
	11	16	美作市時刺し舞道連盟発表会	美作市時刺し舞道連盟/英田公民館	
	12	7	美作市文化連盟文化発表会	美作文化センター	
21	3	21	美作市文化連盟文化祭作品展	作東B&G海苔センター・農村環境改善センター・バレンタインプラザ・作東美術館	～22日
	3	29	美作市日本舞踊連盟設立発表会	美作市日本舞踊連盟/美作文化センター	

## 編集後記

本号編集集中の八月九日、台風九号による豪雨のため、作東地域に甚大なる被害が発生しました。この災害により被災されました会員の皆様にご心よりお見舞い申し上げます。

さて、三十五号の文化誌が、会員皆様方より多数ご投稿をいただき、刊行できましたこと、編集委員一同、感謝いたしております。

今年も特別寄稿として満九十七歳の高齢を押し寄せてきました阿部雲魚氏と岡田千茶氏の玉稿をいただきました。心から感謝いたします。

また、前年に引き続き、グループ紹介を掲載しました。多くのグループがそれぞれ多様な活動を展開し、文化協会全体の活動を支えていただいておりますことに感謝し、より一層の発展とグループ員の拡大を期待しております。

# 作 東 の 文 化

## 第 35 号

平成21年10月15日発行

編 集 作東文化協会文化誌編集委員会  
(美作市教育委員会 社会教育課内)

編集委員 新田 祐之 青山 時弘 安東 靖雄  
梅澤 紀之 小林 秀雄 原 洋一

発行所 作 東 文 化 協 会  
岡山県美作市教育委員会 社会教育課内  
TEL (0868) 72-2900 〒709-4292  
HPアドレス <http://bunka.boj.jp/>

印刷所 株式会社 廣 陽 本 社  
岡山県津山市田町22